

幼児のうたのピアノ伴奏が担う音楽表現の可能性 —保育士養成課程に関する見直しの方向性を受けて—

扶 瀬 絵梨奈

1. はじめに

2018年4月より改定保育所保育指針が適用され、保育を取り巻く環境や社会情勢は目まぐるしく変化している。厚生労働省子ども家庭局が実施する検討会「保育士養成課程等検討会」では、2017年5月より保育士養成課程等の見直しについて検討が重ねられ、2018年12月には「保育士養成課程等の見直しについて(検討の整理)」がとりまとめられた。保育士養成課程を構成する各教科目の目標及び教授内容について、より実践力のある保育者の養成に向け具体的な見直しの方向性が示されたのである。前回の保育士養成課程の改正(2011年度より施行)では、教科目「基礎技能」が「保育の表現技術」へと変更され、基礎技能より保育における表現に係る保育技術を学ぶ科目であることがより明確に示されていた。これは、子どもの経験や保育の環境を様々な表現活動へと結び付けたり、遊びを豊かに展開するために必要な技術を習得できるようにしたりするための改定である¹。今回の見直しでは、幼児教育を行う施設としての保育の実践という観点から、子どもの生活と遊びの援助に関する内容の充実が図られた。これは、改定後の保育所保育指針に示された「育みたい資質・能力」および「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を念頭に置きつつ、より実践的な力を身に付けることを目的とし、子どもの発達過程や実態に即した生活と遊びに関する援助に必要な、具体的な方法や技術を習得させるためのものである。またこれらの新たな教授内容に即し、系列は保育の内容・方法に関する科目となり、教科目名は「保育の表現技術(演習4単位)」から「保育内容の理解と方法(演習4単位)」へと変更された。

これらの改正を音楽表現という面から考えたとき、子どもの感性の育ちを支えるための方向性はどうかあるべきなのだろうか。吉永(2018)が「表現とは、感じたことや考えたことを表出する営みである。教師の指示や合図に操られるかのように音や声を発するのは、表現の本質ではない」と述べているように、子どもの姿のなかには表現に至るまでの内的

1 保育士養成課程等検討会「保育士養成課程の改正内容について」2010.2

なプロセスがあるはずだ。乳幼児の「感じる・考える・工夫する」といった表現の生成過程には、豊かな表現を誘うための知識や保育者自身の表現技術が不可欠であると考え。そこで本稿では、今回の見直しについての要点を整理したのち、園生活の様々な場面において用いられる子どもの歌を中心に保育者の援助の在り方を考察し、保育者養成課程における音楽教育の在り方について検討する。

2. 課程改正の整理と要点

まず、養成課程を構成する各教科目の目標及び教授内容について、今回の見直しにおける教科目の目標および教授内容を比較し、課程改正の要点を整理したい。

見直し後	現行
<p><科目名> 保育内容の理解と方法（演習・4単位）</p>	<p><科目名> 保育の表現技術（演習・4単位）</p>
<p><目標></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 子どもの心身の発達や子どもを取り巻く環境等と保育所保育指針に示される保育の内容を理解した上で、子どもの生活と遊びを豊かに展開するために必要な知識や技術を実践的に習得する。 2. 保育における教材等の活用及び作成と、保育の環境の構成及び具体的展開のための技術を実践的に習得する。 	<p><目標></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 保育の内容を理解し、子どもの遊びを豊かに展開するために必要な知識や技術を習得する。 2. 身体表現、音楽表現、造形表現、言語表現等の表現活動に関する知識や技術を習得する。 3. 表現活動に係る教材等の活用及び作成と、保育の環境構成及び具体的展開のための技術を習得する。
<p><内容></p> <p><u>子どもの心身の発達や子どもを取り巻く環境等と、保育所保育指針に示される保育の内容を踏まえて、子どもの生活と遊びにおける体験（※）と保育の環境を捉え、以下の知識・技術を学ぶ。</u></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. <u>子どもの生活と遊びにおける他者（保育士等や他の子ども）との関係や集団の中での育ちの理解と援助に関わる知識及び技術</u> 2. <u>子どもの生活や遊びにおいてイメージを豊かにし、感性を養うための環境の構成と保育の展開に必要なとなる知識及び技術</u> 3. <u>子どもの生活と遊びにおける様々な遊具や用具、素材や教材等の特性の理解と、それらの活用や作成に必要なとなる知識及び技術</u> 	<p><内容></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 身体表現に関する知識や技術 <ol style="list-style-type: none"> (1) 子どもの発達と運動機能や身体表現に関する知識と技術 (2) 見立てやごっこ遊び、劇遊び、運動遊び等に見る子どもの経験と保育の環境 (3) 子どもの経験や様々な表現活動と身体表現とを結びつける遊びの展開 2. 音楽表現に関する知識や技術 <ol style="list-style-type: none"> (1) 子どもの発達と音楽表現に関する知識と技術 (2) 身近な自然やものの音や音色、人の声や音楽等に親しむ経験と保育の環境 (3) 子どもの経験や様々な表現活動と音楽表現とを結びつける遊びの展開

<p>※子どもの生活と遊びにおける体験の例</p> <p>①見立てやごっこ遊び、劇遊び、運動遊び等における体験</p> <p>②身近な自然やものの音や音色、人の声や音楽等に親しむ体験</p> <p>③身近な自然やものの色や形、感触やイメージ等に親しむ体験</p> <p>④子ども自らが児童文化財(絵本、紙芝居、人形劇、ストーリーテリング等)に親しむ体験</p>	<p>3. 造形表現に関する知識や技術</p> <p>(1) 子どもの発達と造形表現に関する知識と技術</p> <p>(2) 身近な自然やものの色や形、感触やイメージ等に親しむ経験と保育の環境</p> <p>(3) 子どもの経験や様々な表現活動と造形表現とを結びつける遊びの展開</p> <p>4. 言語表現等に関する知識や技術</p> <p>(1) 子どもの発達と絵本、紙芝居、人形劇、ストーリーテリング等に関する知識と技術</p> <p>(2) 子ども自らが児童文化財等に親しむ経験と保育の環境</p> <p>(3) 子どもの経験や様々な表現活動と児童文化財等とを結びつける遊びの展開</p> <p>5. 教材等の活用及び作成と保育の展開</p> <p>(1) 様々な遊具や用具、素材や教材等の特性の理解と活用及び作成</p> <p>(2) 子どもの遊びやイメージを豊かにし、感性を養うための環境構成と保育の展開</p>
--	--

見直し後の科目「保育内容の理解と方法」での内容においては、生活と遊びにおける体験の例として音・音色・音楽の語がそれぞれ一語ずつ表出しているものの、目標と内容のどちらにおいても音楽表現に関する語は減少した。これは、音楽が「子どもの生活と遊び」とより強く結び付けられ、感性を養うための環境構成のひとつとして音楽が捉えられていることの表れと言える。また、かつて14語表れていた「表現」の語は一切姿を消し、新たに「体験」の語が加わった。

身近な自然やものの音や音色、人の声や音楽等に親しむ体験を通し、感性の育ちはどう展開されるのだろうか。保育の場において日々使われる音や音楽は、基本的な生活習慣を身に付けるもの、活動の切り替えに使われるもの、季節を味わうためのもの、行事に用いられるもの、コミュニケーションを豊かにするためのもの等が挙げられるが、それらは子どもたちの生活や遊びと密に結びついている。また、子どもの歌を支えたり導いたりするための伴奏楽器としては、ピアノに限らず、ギターや打楽器も考えられるだろう。しかしながら、音程があること、音域が幅広いこと、和音(伴奏)と旋律(メロディー)を同時に発音できることなどから、ピアノの伴奏は欠くことのできない存在として、重要な役割を担っており、現に園でいまだ根強く支持されていることは、先行研究により明らかである。そこで次項では、子どもの生活と遊びを豊かに展開するための歌唱活動における伴奏の意

義を表現の面から考察したい。

3. ピアノ伴奏が担う表現の可能性

吉永（2016）は著書『子どもの音感受の世界』の中において、保育所内で歌唱指導をしていた際、やわらかい音色で弾いていた伴奏から鍵盤を叩きつけるような弾き方での伴奏へ変化した瞬間、子どもたちの声は一瞬のうちに怒鳴り声へと変わってしまったと、自身の経験を述べている。子どもたちはピアノ伴奏をよく聴きながら歌っていること、そして伴奏の音質が子どもの声の出し方に大きく影響していること、また楽器・保育者の声・ピアノの音色など、すべての音楽的な働きかけが子どもにとって意味のある機会となるよう配慮することが大切だという。子どもたちは保育者のピアノ伴奏に対して「聴く耳」をもち順応するならば、保育者養成校が成すべき音楽教育の要は何だろうか。筆者は、保育士養成課程を構成する各教科目の目標及び教授内容の見直しについて、見直し後の内容においてもキーワードとして引き継がれた「イメージ」「感性」に注目した。子どもの豊かな感性の育ちを支えるための環境構成と保育の展開について、伴奏（特に前奏）の意義を明らかにしたい。本稿では、生活の歌として「おはようのうた」および「おかえりのうた」、遊びに関する歌として「ひげじいさん」「こぶたぬきつねこ」を取り上げた。

まずは前奏に着目する。そもそも、前奏とは何なのか。広辞苑（第七版）によれば「楽曲の冒頭に、主要部への導入として演奏される音楽。序奏。」とある。本編の前の序、という印象を抱きかねないが、子どもの歌唱においてもそれは同じなのだろうか。前奏があることによって歌唱部に入りやすくなることは確かだが、特に新出の歌唱において子ども自身が歌唱部の始まりを判断することは難しく、子どもは歌唱の始まりを保育者による言葉「サン、ハイ」等により認識している。無論、保育者が伴奏によって、前奏の終わりであることを音楽として“表現”したいものではあるが、つまり前奏は、子どもが楽曲を認知し歌唱部への表現を導くという重要な役割がある。よって前奏のない曲は楽曲末尾の2～4小節をとり、演奏することが多い。このことから、保育・幼児教育の場における前奏とは広辞苑による意味の他に、楽曲の情報（拍子や調性は勿論のこと、その曲がどんな性格をもっているのか、これから描かれる世界の風景にいたるまで）を子どもたちへ自然に伝えるためのものであり、保育者自身が描く「表現」のひとつである必要がある。前奏は詞のない「うた」であり、ここに保育内容の理解と方法の「子どもの生活や遊びにおいてイメージを豊かにすること」や、「子どもの感性を養うための環境の構成」があると筆者は考える。

「おはようのうた」作詞：高すすむ、作曲：渡辺茂

D-Dur、4分の2拍子 1～10小節²

The musical score consists of two systems. The first system shows the piano introduction with chords D, A7, and D. The second system shows the vocal line starting with the lyrics 'せんせい おはよう みなさん おはよう きょうも なかよく'.

一日の始まりに相応しい、明朗快活な前奏に始まる。主和音から派生した付点のリズムが楽しい旋律は、上向音型の経過音を経て再び主和音へ着地する。一小節目に楽曲の最高音であるH音が置かれ、1～2小節目にかかる山型の音型は日の昇りをイメージさせるような、気分の高揚を誘う。低音部は主和音により始まり、歯切れの良い四分音符のリズムが注目させる。冒頭の旋律 D- (Fis) -A 音が、前奏の終わりの D 音—歌詞始まりの A 音と呼応している。また、前奏の1～4小節には歌唱部分の5～9小節と同じコード進行が用いられていることで、歌唱部冒頭の音程感を援助している。前奏部末尾は主和音へ解決し、直後に置かれた四部休符が前奏部と歌唱部を自然な流れの中で分別している。その後、歌唱部も付点のリズムによって開始され、ここに前奏との大きな関連がある。

11小節～16小節

The musical score shows the piano accompaniment and vocal line for measures 11-16. The piano part has chords A7 and D. The vocal line has lyrics 'あそびま しょう ね ね あそびま しょう'. The tempo is marked 'poco rit.'.

² 音名にはドイツ音名を用いることとする。

幼児のうたのピアノ伴奏が担う音楽表現の可能性

全体を通して2拍子の快活なリズムが一貫され、低音部において四分音符で刻まれるコードがテンポの保ちに役立っている。また、2小節ごとの旋律の開始音はA → G → Fis → E → Dと展開され、前奏の最高音Hを受け継ぎ下降音型をたどる。終結部は、次の活動へと落ち着きをもって導くよう poco rit の指示を受けゆっくりと終止する。

「おかえりのうた」 作詞：天野蝶、作曲：一宮道子

C-Dur、4分の4拍子 1～6小節

♩ = 126

天野 蝶 作詞
一宮道子 作曲

1. きょうもたのしく
2. おりがみつみきも

すみました
かたづけて

な かよ しこよしで
お かえ りおしたく

か えり ましう
で きました

この楽曲の大きな特徴は、前奏部の第一音に最高音が置かれていることである。楽しかった一日の活動表のように、豊かに響く。しかしその後は「おはようのうた」と相反し、下降音型により歌唱部へと移る。前奏部では一貫してCのコードが奏され、「おはようのうた」同様、左手の四分音符による刻みがテンポの保ちの一助を担っており、旋律の付点音符をより際立たせている。

7～10 小節

前半の歌唱部で用いられていた C, F, G のコードが分散和音となり、曲調に変化を与えている。付点音符の連続と 2 小節毎に置かれていた四部休符が解かれることで、4 小節の大きなフレーズを作り出されている。作曲者によるテンポの指示 (♩ = 126) は、この 7～10 小節を子どもたちがひと息で歌いきることができるための設定であろう。ブレスの間に無いことも考慮したい。

「ひげじいさん」 作詞：不明、作曲：玉山英光

D-Dur、4 分の 4 拍子 1～12 小節

前奏のない手遊び歌である。末尾の2小節または4小節をとって前奏とするのがスムーズであろう。同音連打の「とんとんとん」とおよびそれに続く偶数小節の開始音がD→E→Fis→G→Aと、順次進行の上行形をたどっている。11小節の「らんらんらんらん」が、その逆行形で下行し、手遊びの上下運動と音程が連動している。つまり子どもたちは、音程の上下を聴きながら身体運動の遊びを實踐できることになる。音楽の中で自然に結びつけられたこれらは、空間的イメージを表現することにも繋がるだろう。

「こぶたぬきつねこ」作詞・作曲：山本直純

D-Dur、4分の4拍子 1～11小節

The musical score is written in D major (one sharp) and 4/4 time. It consists of two systems. The first system covers measures 1-4, and the second system covers measures 5-8. The piano accompaniment features a rhythmic pattern of eighth notes in the right hand and quarter notes in the left hand. The vocal line is in a simple, child-friendly style with lyrics in Japanese. The score includes dynamic markings such as *f* and *mf*, and chord symbols like D, A7, and D7. There are also first and second endings indicated by '1.' and '2.'.

しりとり歌・まねっこ歌としてよく知られたこの曲は、言葉と音楽の綾も愉快で、それぞれの音程が、こぶた (D-E-Fis)、たぬき (G-Fis-E)、きつね (Cis-D-E)、ねこ (Fis-D) といった言葉のイントネーションと完全に一致している。D音～H音の山型音型による前奏の旋律は、歌唱部の冒頭D音～楽曲の最高音Hをひととおりなぞるよう工夫されており、前奏冒頭のリズムと音程は、歌唱部分と合致する。歌唱部分はアウフタクトにより

始まるが、2小節目の前奏が3拍目で主和音へと終止することにより、歌唱の入りを自然に導いている。繰り返しの後、第10小節3拍目から始まる楽曲の後半部は、同じ音型ながらも音程が3度ずつ上げられている。第11小節には楽曲全体を通しての最高音がH音として現れているが、ジャーシルド・ビンストックら(1934)によれば、子どもの発達による声域の広がりは3～4歳児においてこの音程に到達できるとされており、幼児期の声域を考えても無理のない歌唱音域が守られている。

12～18小節

Chords: G, Em7, A7, D

Vocal lyrics:
 き き つ ね わ こ プ プ オ
 ボン コン コン ニヤー オ
 た ぬ き き つ ね わ こ ニヤー オ
 ボン ボコボン コンエン

後半部で大きく変化しているのは、コード進行である。低音部譜表における伴奏の音程は、前半部では小節毎にA音へ下降していたが、11～14小節の4小節間にカデンツが作られ、主和音に終始する。

4. まとめ

本稿で取り上げた4曲の楽曲のうち、生活の歌「おはようのうた」および「おかえりのうた」は、伴奏によって子どもたちが生活の情景や場面をイメージできるための表現が生かされていることが分かった。また、遊びに関する歌「ひげじいさん」および「こぶたぬきつねこ」では、遊びのねらいが音楽の形式や伴奏の構成に結びついていることが分かった。保育所保育指針解説では、感性と表現に関する領域「表現」のねらい及び内容のなかで「子どもが思いのままに歌ったり、簡単なリズム楽器を使って遊んだりしてその心地よさを十分に味わうことが、自分の気持ちを込めて表現する楽しさとなり、生活の中で音楽に親しむ態度を育てる。ここで大切なことは、正しい発声や音程で歌うことや楽器を正しく上手に演奏することではなく、子ども自らが音や音楽で十分遊び、表現する楽しさを味

わうことである。そのためには、保育士等がこのような子どもの音楽に関わる活動を受け止め、認めることが大切である。」と、子どもの歌唱活動には音楽表現による楽しさに重きを置くべきことが記されている。子どもの感性の豊かな育ちを支えるためには、保育者が奏でる伴奏がいかにか大きな意味をもち歌唱と密接にかかわっているのか、それらの関係について理解しておくことが大切である。音楽が「子どもの生活と遊び」という側面により強く結び付けられた今回の見直しを受け、保育現場における音楽に求められる役割はますます深化・拡大してきている。今回の考察を踏まえ、保育者養成校における音楽の伴奏表現指導の在り方について、今後も検討を重ねていきたい。

5. 参考・引用文献一覧

- 金田一春彦、秋永一枝 (2014) 『新明解日本語アクセント辞典』東京：三省堂
- 厚生労働省 (2017) 「保育士養成課程等の見直しについて——より実践力のある保育士の養成に向けて—— (検討の整理)」
- 厚生労働省 (2018) 「保育所保育指針解説」
- 新村出 (2018) 『広辞苑 (第七版)』東京：岩波書店
- 須藤貢明、杵鞭広美 (2010) 『音楽表現の科学—認知心理学からのアプローチ』東京：アルテスパブリッシング
- 中山忠政 (2012) 「保育士養成課程における教科目名称の変更「養護内容」から「社会的養護内容」へ」『プール学院大学研究紀要』第 52 号: 177-186 頁
- 無藤隆、浜口順子、宮里暁美、刑部育子、砂上史子、吉川はる奈、岩立京子、吉永早苗、郡司明子 (2018) 『新訂事例で学ぶ保育内容<領域>表現』萌文書林
- 吉永早苗 (2016) 『子どもの音感受の世界——心の耳を育む音感受教育による保育内容「表現」の探究——』東京：萌文書林

6. 楽譜資料

- 小林美実 (2017) 『保育実用書シリーズこどものうた 200』東京：チャイルド本社
- 柳澤邦子、三谷亜矢 (2018) 『感じる心を育てる幼児のうた——心に届く音楽あそび・歌あそび——』東京：フレーベル館

Possibility of Musical Expressions Played by Piano Accompaniment by Young Children's Songs : Reflecting the Direction of Reviewing Nursery Teacher Training Course

Fuse, Erina*

2018年4月より改定保育所保育指針が適用され、保育を取り巻く環境や社会情勢が目まぐるしく変化しているなか、保育士養成課程を構成する教科目についても検討が重ねられ、2018年12月には「保育士養成課程等の見直しについて（検討の整理）」がとりまとめられた。各教科目の目標及び教授内容については、より実践力のある保育者の養成に向け具体的な見直しの方向性が示され、教科目「保育の表現技術」は「保育内容の理解と方法」へと変更された。子どもの心身の発達や環境等により寄り添うことが明示され、音楽表現は一方的なものではなくそれらを通して自然に豊かな感性と表現が育まれることが求められている。本稿ではピアノによる伴奏を用いる子どもの歌を中心とし、伴奏表現による子どもの感性の育ちについて考察し、伴奏によって子どもたちが生活の情景や場面をイメージできるための表現が活かされていることや、遊びのねらいが音楽の形式や伴奏の構成に結びついていることを明らかにした。

キーワード：ピアノ、弾き歌い、音楽表現、保育士養成課程等の見直し

